MEDICAL OFFICE

医療の最前線からのワンポイントアドバイス

糖尿病関連腎臓病治療の新時代

医学部内科学教室（腎臓・内分泌・代謝）教授　林（はやし）　香（かおり）

皆さまはご自身の腎機能をご存じでしょうか。定期的に健康診断は受けていらっしゃいますか。年齢とともに腎機能は緩やかに低下しますので、人口の高齢化を背景にして、慢性腎臓病の数は増えており、日本では２０００万人が慢性腎臓病といわれています。腎臓は尿をつくる機能にとどまらず、血圧調節・電解質バランスの維持・骨ミネラル代謝や造血、免疫システムに関与し、心血管の健康や全身の老化にまで影響する“からだの要”として働いています。腎臓は「沈黙の臓器」といわれており、かなり機能が低下するまで症状が出ないことも多いため、早期発見には定期的な健康診断が必要です。さらに腎機能が低下してくると、腎臓の代わりをする治療「腎代替療法」（血液透析、腹膜透析、腎移植など）が必要になります。しかし、腎機能が低下すると困るのはこれだけではありません。実は症状が出ていないような段階から、心血管合併症の発症リスクは3倍にもなり、生命予後にも関係することが示唆されています。

日本では維持透析導入になる最も多い疾患は糖尿病関連腎臓病ですが、最近その割合が少し減少に転じており、新しい治療の選択肢が出てきたことによるといわれています。現在、糖尿病関連腎臓病治療の４つの柱は、レニンアンジオテンシン阻害薬、ＳＧＬＴ２阻害薬、ＧＬＰ－１受容体作動薬、非ステロイド系ミネラルコルチコイド受容体（ＭＲ）拮抗薬とされており、これらの薬剤はそれぞれ異なる作用点で腎保護に働きます。ＳＧＬＴ２阻害薬は、尿に糖を排泄することで血糖を下げる薬として登場しましたが、その後腎臓の負担を軽減し心臓の保護にも作用することが明らかになりました。ＧＬＰ－１受容体作動薬や非ステロイド系ＭＲ拮抗薬は炎症や線維化を抑えるといわれています。これらの薬を適切に組み合わせることで、腎機能の低下スピードを遅くし、心血管合併症を防ぐことが期待されています。

糖尿病関連腎臓病は、かつては「進行すれば透析は避けられない病気」と考えられていましたが、今や早期発見と適切な治療介入によって、腎機能を長く保てる可能性が高くなってきています。しかしながら治療介入によっても、腎機能低下のスピードが速い方も中にはいらっしゃいますし、糖尿病以外の原因で腎機能が低下する方も増えています。できるだけ多くの方の腎機能を保ち、健やかに日々を過ごせるように、今後ますます新しい腎臓病治療薬が開発されることを願って、私たちも日々診療や研究に励んでいます。